

「ボードリヤールの批判的記号論」を めぐる近年の諸論調

—— 現代批判的記号論研究の一章 ——

大橋 昭一

I. まえがき——問題意識と論述限定

近年、世界的に強く注目されているものに「批判的記号論 (critical semiotics)」がある。これは、現在の資本主義的体制に対しなんらかの批判的立場をとる記号論説の総称とっていいものである。最近におけるそのまとまった書には、カナダ・オンタリオ大学のジェノスコ (Gary Genosko) の 2016 年の著 (文献 G4) がある。その内容の一部は、別拙稿 (Q4) で論述済みであるが、本稿では、そこでは取り上げられなかったフランスの著名な論者ボードリヤール (Jean Baudrillard) に関する所論を考察するものである。

ボードリヤールの所説についてジェノスコは、2016 年の上記の書以外において、すでに 1994 年、ボードリヤール説の解明に専念した著『ボードリヤールと記号——シグニフィケーションを燃え立たせるもの——』(文献 G2) を公表し、2007 年には「記号論と構造研究に対するジャン・ボードリヤールの貢献」という論考 (文献 G3) を発表している。またフィリピン人のサン・カルロス大学のメンドーザ (Dary Y. Mendoza) は、2010 年に、ボードリヤールの「ハイパーリアリティ (hyperreality)」概念の解明を中心にボードリヤール説の論究を試みている (文献 M5)。

周知のように、ボードリヤール説は多面にわたり、世界的に多くの研究がある。本稿は、近年における批判的記号論研究の一環として、かつ、最近におけるボードリヤール説研究に限って、つまりそれらを直接的な論述資料として、ボードリヤール説の特色を究明するものである。

まずメンドーザの論考を取り上げる。結論を先にして、メンドーザの論考で主題となっているものについていえば、ボードリヤール説で課題となっているものは、現在社会をハイパーリアリティとしてとらえ、その生成の根源や形成要因を解明するところにある。方法論的にはボードリヤールは、マルクスの『資本論』における商品社会の分析から出発しつつ、ソシュール (Saussure, F.) などの“記号—言語論 (semio-linguistic)”でそれを補完し、そして取り替え、結局は、今日のハイパーリアリティは、そうした記号—言語によるコミュニケーションで覆われたものであって、根本的にはそのあり方のいかんによって社会の実際のあり方も決まるとするものである。

メンドーザのこの論考には、ボードリヤール説の全体像が要約的に明らかにされている。ち

なみに、ボードリヤール説についての要約的なこのようなとらえ方は、メンドーザだけの特有なものではない。かなり一般的なものである。例えば“*Encyclopædia Britannica*”の“Jean Baudrillard”の項(文献E2)には同趣旨のことが簡潔に書かれている。

なお、記号論を指す原語(英語)は、一般的には“semiotics”であるが、ソシュールの説とパース(Peirce, C.S.)の説を区別して表記する場合には、ソシュール説は“semiology(記号学)”, パース説は“semiotics(記号論)”と別表記される場合があり、本稿でも原書に照応しようしている場合がある。ただしこうした場合も日本語表記は“記号論”で統一している。また、最近における記号論の動向としては「批判的記号論」とならんで「組織記号論」が注目されるものであるが、これについてはさらに参考文献Q5をみられたい。なお、参考文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

II. メンドーザによる「ボードリヤールのハイパーリアリティ論」

(1) ボードリヤール説の出発点——マルクス主義と記号理論との接合

この問題においてボードリヤール説で出発点になっているものは、メンドーザによると、リアリティのとらえ方のいかんに関する問題で、これを論じたボードリヤールの著には、例えば1976年の“*L'Exchange symbolique et la mort*”(文献B1)などがある。これらは、前書き的に一言すれば、方法論的には、一般に“ネオ・マルクス主義”といわれるものであるが、内容的にはリアリティのとらえ方において、マルクス『資本論』の商品概念を出発点としつつも、それをソシュールらの記号論説で補完しようとしたといえるものであった。

これはメンドーザによると、当時のボードリヤール説は、マルクス『資本論』の観点からすれば、今日の商品社会の分析において、マルクス主義的な考え方をさらに徹底的なもの、あるいは急進的なもの(radical)にする方向のものであり、今日の社会について支配—被支配の関係を基礎にして、生産と消費、使用価値と交換価値、土台(base)と上部関係の問題を、新しい考え方のもとにとらえ直そうとする(inversion)ものであった。

ただしこの場合ボードリヤール説で指導理念となっていたものは、前記のように、ハイパーリアリティの解明であったから、それは次のような道筋で、すなわちマルクス『資本論』に立脚したところの、現在社会を商品社会ととらえる考え方から出発し、それにソシュールらの記号論的な考え方を採り入れつつも、結局はそれに移行することによって、つまり単なる商品の集積と見る考え方から、記号論的に彩られたスペクタクルな社会と見る考え方に移行することによって、解明されうするというものであった(M5, p.46)。従ってこれは、2つの段階に分けられる。

第1は、マルクスの商品社会分析をどのようにとらえ直すかという問題である。ここにおいて特徴的なことは、ボードリヤールが、社会の富は商品にあるというマルクスのテーゼに立脚しつつも、その場合商品の動きではコミュニケーションが重要な役割を果たすことを導入し強

調していることである。それは、商品については、製造過程において原料となるものでも、あるいは家庭等で直接人間消費の対象になるものでも、そのために動くことを必須とするから、動くことができるよう意思の疎通があること、すなわちコミュニケーションがあることを必須の要件とするというものである。故に、社会の富は商品の集積としてとらえられるとしても、それはコミュニケーションを絶対不可欠な要因とするはずのものである、というのである。

こうしたボードリヤールの商品分析、従って社会分析ではコミュニケーションのあることが決定的に重要とされる考え方は、要するに（前記で一言した）“記号—言語論”的アプローチとよばれるものであるが、この点についてメンドーザは、マクルーハン（McLuhan, M.）が「マルクスは、生産について唯物論的分析を行っているが、そこでは（かれのいういわゆる）生産力だけが特権的なものとして扱われ、言語や記号、従ってコミュニケーションは除外されたものとなっている」と述べているところを引用している（M4, cited in M5, p.47：本稿における引用文内のカッコ文は、他の断わりがない限り、本稿筆者のもの）。さしあたりボードリヤール説は、マルクス理論のこのいわゆる欠落点を補強するものと位置づけられる。

（2）ボードリヤール説の進展——マルクス主義理論の超克

これに基づき第2にメンドーザが指摘していることは、ボードリヤールでは当然に生産と消費との意味づけの順位が変わっていることである。メンドーザによれば、「ボードリヤールでは、現在社会における商品分析で要諦となるのは、（マルクスのいうように）生産ではなく、その対極のもの、つまり消費である」ということになる（M5, p.47）。

このことをメンドーザは、「ボードリヤールによれば、消費は、需要を充たすための生産の単なる受動的な延長というものではない。そうではなくてむしろ、（広告・宣伝等による）『記号上の活動（manipulation）』が必要な記号受容者として、消費者がまさに『人格ある人間（the person）』として創り出され、当該社会体制に統合されたものとなるよう行われるところの、積極的な行為（an active endeavor）と規定されるものである」と書いている（M5, p.49）。

そこでメンドーザは、ボードリヤールでは消費は“商品の人間化（personalization）”とよばれるものであって、「それは、主体の客体化（objectification）であり、かつ、客体の主体化（subjectification）である」と規定されるものであるが、ボードリヤールによれば、現在の資本主義的社会では、社会において一人の人間のアイデンティティを生み出し決定づけるものは、（生産ではなく）消費であると提議されるものになる、と論じている（M5, p.48）。

この段階では、今やボードリヤールの所論は、マルクス説を補完するというだけのものではなく、それに反対のものとなっている。ここで看過されてならないことは、こうした消費第一主義が、社会の記号化とともに進行するとされていることである。すなわち、ここで消費されるものは、当該製品そのものというよりは、製品がコミュニケーションするもの、つまり記号として発するものと規定されていることである（M5, p.49）。消費者が消費するものは、事物として

の商品そのものではなく、記号として表象されるところのものであると、とらえられる。

そしてこれは、ボードリヤールでは“記号価値 (sign value)”として提示されているものである。つまり商品は、商品そのものとしてではなく、こうした記号価値を体現するものとして現れる。では、マルクスが商品について提議しているところの“使用価値 (use-value)”と“交換価値 (exchange-value)”とはどのように規定されるものとなるのか。

ボードリヤールによると、マルクス主義経済学では、この問題は基本的には次のような論理のうえにたっている。まず出発点になるのは、当該商品の有用性すなわち使用価値であるが、これは、実際の具体的な消費の場で成立するものであるから、本来はその商品の所有者・使用者により異なる主観的なものである。しかしそれが市場等で取引対象となる場合には、使用価値は多くの人々により認められている標準的な使用価値として、すなわち客観化された使用価値として通用する。こうした標準的な客観的な使用価値に立脚して他の商品との交換がなされ、当該商品の交換価値が決まる。この意味では交換価値は、使用価値にくらべて二次的なものである。

これがマルクス主義経済学でも本来の考え方であるが、これに対してボードリヤールは、こうした考え方は、その基本そのものが今日の社会ではもはや妥当性がないとする。というのは、ボードリヤールによれば、市場における商品価値の決定に際し最初から決定的な地位にあるものは、使用価値ではなく、交換価値であるからである。メンドーザは次のように書いている。

「ボードリヤールでは、マルクス主義理論のこの2つの基本概念について、位置づけがマルクスの場合とは全く逆転されたものとなっている。そればかりかボードリヤールでは、結局、商品にはいわゆる客観的な価値は1つもないことになる。というのは、使用価値も、交換価値にとって単なる照会上のアリバイとなっているだけのものであるからである。つまり使用価値は、交換価値にとっては想定上においてあるだけのもの (an imaginary excuse) であって、客観性のない (non-objective) 価値概念であり、無用の (use-less) 価値概念であるからである」(M5, p.50)。

それ故ボードリヤール説では、商品は交換価値と記号価値があるだけであり、市場で商品が交換されるという場合、商品自体が交換されることもさることながら、何よりも言葉 (language) やコンセプト (concept)、記号が交換されると理解されるべきものとなる。

従ってボードリヤールでは、「(マルクスの商品概念で挙げられている) 交換価値と使用価値に代わって、記号価値が前面にたつものとなるから、それに応じてすべての商品は、1つのイメージとなる。…(商品において) 記号という性質が強くなればなるほど、商品の物理的実体的なものについての欲求 (needs) はもはや強いものとはならない。物理的な実体的なものは記号というもので代表されるからである。故に人間欲求のゆるぎない起源は、今やイデオロギー的なものにあることになる」(M5, p.52)。

ところでこれは、マルクス主義理論の見地からは、人間行動の起源が、(社会の物的な) 土台的部分にあるのではなく、考え方やイデオロギーなど上部構造にあることを主張するものである

が、この点は、ボードリヤール説ではどのようにとらえられるのか。

(3) 土台と上部構造について

メンドーザによると、ここでボードリヤールは、現在社会では例えばクレジットカードや株式売買制度の発展・拡充により“交換形態の抽象化・名目化 (abstraction of exchange form)”，すなわち記号的なものによる代表化が進んでいるとする (M5, p.52)。クレジットカードは、実体的にも貨幣を代表するものであり、これにより多くの国では、貨幣所有なしで、つまり貨幣の直接的媒介なしで、生活が可能になる。

故にこれには、少なくとも貨幣形態からの抽象化、あるいは貨幣の捨象化が起きるという側面があり、一般的にいえば、商品交換形態の抽象化と特色づけられる側面がある。これはとりもなおさず、交換行為が貨幣—商品という物的対象から、その代表的なものあるいはイメージ的なものに移行していることを意味する。本稿筆者のみるところでは、今日論議が盛んないわゆる“仮想通貨”も、これがさらに進んだものと考えられる。

こうした貨幣形態の捨象化、他の記号的なものによる代表化は、メンドーザによると他面において、社会が全体として商品化の傾向をますます強めていることを示すものであるが、その場合商品においては競争激化が進むから、それに耐えよう他の商品との差別化を進展させる必要がますます強くなって、商品の文化品化が進むものとなり、経済と文化との合体が進行するものとなっている。これは、すでに例えばドゥボール (Debord, G.: 文献 D) により、今日社会ではすべてのものが今や代表されたもの (representation) となっており、社会は巨大なスペクタクルなものの蓄積になっていると評されているものである (D, cited in M5, p.53)。

こうした動向を全体的にみると、この問題について次のような考え方にたつ論者が、ドゥボールはじめいく人かがあるということがいえる。すなわちかれらは、マルクスの主張した土台と上部構造に関するいわゆる唯物史観テーゼに立脚して、支配階級的立場にたつイデオロギーが社会全般的なそれになるという考え方を認めるが、しかし他方では、例えばドゥボールらのように「リアリティに対するこうした誤った意識からの解放は可能」という中間論的見解を持っている人たちである。これに対してボードリヤールは、メンドーザによると「それはフィクションである」と断じ、少なくともこの点では「ボードリヤールは、ドゥボールらとは見解が異なり、さらに徹底した考えを提示しているもの」と規定される。

この点についてボードリヤールは、次のように論じている。すなわち、記号形態やイメージは、確かに最初は経済的な交換行為から生まれるのであるが、政治経済の枠内にとどまることはできないものである。というのは、記号は、ある対象物が記号として表わされるや否や、他の対象物も記号として表わされるように作用するからである。つまり、あるものが記号として、とりわけシグニファイアー (signifier: 記号担い手 (sign vehicle): 端的には記号そのもの) として表わされるや否や、それは当該の社会と文化の全構造に作用し、それらが1つの記号的過程 (a semiotic

process) となるように機能する。これは現代では、マスコミュニケーションの進展や文化の一層の商品化によってさらに促進されたものになっている、というのである (M5, p.55)。

これらの点をふまえてメンドーザは、ボードリヤールの考え方について、それは一方では、マルクスが提示した生産様式論の枠外に出るものであり、いわば生産様式自体が今や1つの記号と考えられるものになったとするものであるが、他方ではそれは、さらに記号論説では、ソシュール説を超え、例えば「シグニファイアは、単に当該シグニファイド (signified: 端的には当該記号で示される物事) を示すだけのものではなくになっている」というべきものになっている、と位置づけられるものとしている (M5, p.55)。

いずれにしろ、ここでマルクスが提起した土台と上部構造の理論、すなわち唯物史観は否定されたものになる。すなわちこの点についていえば、ボードリヤールでは、マルクスが提示した唯物史観の全構造は、「記号の巨大なシミュレーション・モデル (a giant simulation model)」に転化したものとしてとらえられるのであって、そこではこの(資本主義的体制の)根本的諸要因 (postulates) のイデオロギー的普遍化が志向されているものと位置づけられる。

故にメンドーザによれば、ボードリヤール説にとっては「ここで、マルクスの生産理論は終わる。(ボードリヤール説によれば) この後はあらゆる事柄が、1つの記号システムとして再生産されるのであり、それ以上に必要なものは何もない」と特徴づけられるものとなる (M5, p.56)。本稿におけるメンドーザによるボードリヤール説についての体系解明志向的な論述は、以上とする。その結論的要点は、メンドーザによると、次のように提示されるものである。

すなわち、ボードリヤール説では「始まりにおいて、後期資本主義の社会的条件を把握し診断するためには、マルクス主義のフレームワークはコミュニケーションという要因で補足される必要があるとされた。これは、ボードリヤール説ではマルクス主義を超え、その疎外と生産の理論を超えるものであったが、さらに進んで、社会のあり方は記号のあり方によって決まるという考え方が立脚点とされることによって、ボードリヤール説は今日のリアリティに合ったもの、つまりボードリヤールのいうハイパーリアリティを解明できるものになった」 (M5, p.58)。

次に、ボードリヤール記号論説の内容解明志向的なジェノスコの書を取り上げる。ジェノスコの主な著書には、既述のように、1994年の書(文献G2)と2016年の書(文献G4)があるが、ここでは2016年の書を中心とする。ボードリヤールによる記号論はじめ現代社会についての分析・論評は、実に多くの分野にわたるが、ここでは、マルクス『資本論』の中軸概念である商品、およびその土台である価値についての論議を、ボードリヤールが記号論の概念を使ってどのように分析し、解明しているかを中心に考察する。ボードリヤールは記号論的観点から商品・事物の価値を論じている、実に注目すべき所論を提示している。以下本稿では、その真髄部分に迫ろうとするものである。

III. ジェノスコによる「ボードリヤールの批判的記号論」の論究

(1) ボードリヤール説の問題意識について

ボードリヤールの記号論説について、ジェノスコは、すでに 1994 年の書において「ボードリヤールが長年にわたって記号について批判的に取り組んできたことは、これまでのところ充分には評価されてこなかった」と指摘しているが (G2, p.xvii), その 2016 年の書では、第 2 章のタイトルが「ジャン・ボードリヤールの“アンチ記号論 (anti-semiology)”」とされ、その本文冒頭において「ジャン・ボードリヤールの初期の著作には、(伝習的な) 記号論に対する徹底的に究明された反対論として最も壮大な事例の 1 つが見られる」と評し、つづいて「ボードリヤールによる批判的記号論 (critical semiotics) に対する貢献は、(一言でいえば) かれの“アンチ記号論”の主張にある」と論じている。そしてこの点に関連するボードリヤール説の本義は、次の 3 点にあると提議している (G4, p.55)。

- ① 価値についての言語理論 (linguistic theory of value) を提起していること、
- ② 記号の恣意性 (arbitrariness of the sign) について解明していること、
- ③ シグニファイアーとシグニファイドとの合体性 (the very unity) を究明せんとしていること。

この場合なかんずくそれは、商品と記号との関係、さらにはボードリヤールの中軸概念であるシンボリック的交換 (symbolic exchange) にかかわって、独自の考え方を提起しているところにあるとしている。

この点についてジェノスコは、ボードリヤール説を論究した 1994 年のかれの書においてすでに、ボードリヤール説の中核点は「商品と記号とのホモロジー (homology: 位相合同: 詳しくは本稿で後述) を通じて明らかになった構造形態 (structural form) を解明するところにある」としているが、その場合指導基線となっていることは、一言でいえば、「ボードリヤール説で戦略的な (strategic) 意義を持っているのは、(商品の) 交換価値とそのシグニファイアーとの問題である。これに対し使用価値とシグニファイドとの問題は戦術的な (tactical) 意義しかない」ということであり (G2, p.5), ボードリヤール説で商品というものは交換価値において決定的意義があることが、すでにここで明示されているとしている。

それ故ここにおいて次に、ジェノスコの 1994 年の書において「バー・ゲーム (bar games) の理論」と名づけられているものの大要を考察する。これは、同書の第 1 章とされているもので、実質的に (少なくとも当時におけるジェノスコの見解では) ボードリヤール説の根底的原理となっていると思料されるものである。ただしこの「バー・ゲームの理論」に関する論述部分は、ジェノスコの 2016 年の書 (文献 G4) では全くオミットされている。

(2) 「バー・ゲームの理論」

ジェノスコは、この第 1 章の冒頭において、ポストモダン理論の提唱者として名高いリオター

ル (Lyotard, J.) が1975年 (文献L2) に、批判的な識別のためには“分離のバー (a disjunctive bar)”が必要と論じているところを紹介している。このうえにたってジェノスコは、こちら側とあちら側とを識別するためには、リオタールのいうように、分離 (disjunction) と接合 (conjunction) を明確にするために、こうしたバーが両サイドで必要と宣している (G2, p.1)。

そしてそれは、そこではパワーが働いていることを示すものであり、しかもそのパワーは、ギャロップ (Gallop, G.) によると、記号では、シグニファイアーがシグニファイドの上位に来るものとし、シグニファイアーにはこうした力があるものとして、すなわちシグニファイドに対し行使するパワーを保持するものとして、ボードリヤールでもそのようなものとして、すなわち“power bar”として理解されているものとされている (G1, cited in G2, p.2)。

この場合ジェノスコによると、ボードリヤールでもこのバーは、例えば“生と死”との境界線というものであるが、ただしそれは、例えば“生と死”という場合でも、シンボリックなコミュニケーション関係があれば、現世的限界を超える能力があるとされるものである。しかしこの場合、ジェノスコによると、ボードリヤール説にはいくつかのバーがあることになっている。故にこのバーの力は、例えば価値領域と非価値領域との識別を可能にするものであり、そのあり方がここでいう“バー・ゲームの理論”であるとする。

実はジェノスコは、この“バー・ゲームの理論”に対しそれほど賛成・推進の立場をとっていない。このことは、例えばこの部分は、ジェノスコの2016年の著 (文献G4) では全くオミットされているところに示されている。また本稿筆者としては、何よりもこれは本来、ポストモダン論的な“組織化のための理論 (organizing theory)”とはいえないからであると考えられる。

しかしジェノスコによると、これには他方では、(物や行為の) 交換 (exchange) において、その同等性 (equivalence) のいかにについて考える場合には有用性がある。故にジェノスコによれば、この“バー・ゲームの理論”が有用であるのは、一般的に言えば、これまでの記号の形態や構造を革新し、変革するような場合である。従ってジェノスコの1994年の書では、ここにおいて“バー・ゲームの理論”が提示され、その一環としてボードリヤール記号論の基礎的的原理的概念が提起されて、その論究がなされていると考えられる。その要点は、次の2点にある。

まず、商品と記号との一体化的把握のような場合は、上記で一言したように、ジェノスコの場合ホモロジー (位相合同) といわれるが、第1点はこれにかかわるものである。ちなみにこれをホモロジーとよぶのは、本稿筆者のみるところ、グレマス (Greimas, A. J.) の記号論説の影響によるものと思われる (グレマス説について詳しくはQ1, 2, 3参照)。グレマス説では2極対立関係にあるものが拡大されて、4者のものの間の関係として把握される。そしてその関係には対抗関係 (contrariety)、含意関係 (implication) および矛盾関係 (contradictory) であるとされて、それは四角形的に示されるものとされている。一般にこの四角形的関係がホモロゲーション (homologation) とよばれる (M2, p.13)。

ボードリヤールのこうした点についてジェノスコは、「ボードリヤールの構造主義性 (structuralist) と記号論的論究 (semiological operations) とは、ボードリヤールがどのような伝統に従って動いて

いたかを示すものである。ただしボードリヤールの“バー・ゲーム理論”は、かれがこうした伝統から離れ、関係がないものとなるよう奮闘してきたことを示すものでもある」と評している (G2, p.3)。

第2点は、ボードリヤールが標榜していたアンチ記号論的見地にたつ“バー・ゲーム理論”に立脚したシンボリック的交換の一般理論の確立にかかわるもので、それは、例えば構造関係理論の再構成 (reconfigure) もしくは再形成 (reshape) に志向するものである。詳しくは本稿次項で述べるが、それは、大綱をジェノスコに従って一言でいえば、「マルクス主義政治経済 (学) (political economy) と記号論 (semiology) との間における合流転換 (conversion) を図るものである。その際指導基線になるものは、商品と記号とのホモロギー的構造化であるが、それは、両者が“1つの客体的形態 (an object form)”に変貌することを目指すものである。故にそれは究極的には、両者についてボードリヤールが“セミアージュック (semiurgic)”とよぶものの特定の決定要因として廃滅になる」(G2, p.4) という位置づけのものである。

(3) 価値形態と記号形態との合流転換

ジェノスコの書では、以上に基づきボードリヤール説における価値形態と記号形態との総括的な表が提示されているが、実はこの表は、ジェノスコの1994年の書と2016年の書では、内容に違いがある。ここでは、後者、すなわち2016年の書の場合を管見する。

ジェノスコはこの書では、ボードリヤールが以上に基づき“政治経済 (学) と記号言語論 (semio-linguistics) の失敗 (failure)”とよんでいるところのもの、さらにはこのことを立証するために用いられている“擬似的代数的方法 (pseudo-algebraic process)”の特徴を明らかにし、批判的記号論における位置づけを示そうとしている (G4, p.55ff.)。

ジェノスコのみるところ、それは、なんらかの形で直接的にはマウス (Mauss, M.: 文献 M3) の“ギフト論 (gift theory)”にヒントを得て、今日の経済体制について、マルクスがそれを“商品—貨幣—商品”という交換過程としてしているところを、“ギフト供与 (giving) —ギフト受取 (receiving) —お返し実行 (returning)”という過程としてとらえることを出発点とするものである (G4, p.56)。

ただしこの場合、さらに細かくみると、前者のマルクス主義的とらえ方のなかには、商品としての交換以外に、次のものが含まれる。例えば、単なる事物 (物品やそれに相当する行為等) の交換 (例えば物々交換等) や一方的贈与など、あるいはヴェブレン (Veblen, T.: 文献 V) により指摘されている有閑階級等におけるステイタス (status) に基づく交換や消費の関係である。

そこで、この点に関するボードリヤールの見解をみると、こうした関係には4種のものがあるとされている。それらは、ジェノスコによると、定式的には表1のように示される。

これは、別言すれば、マルクス主義的なとらえ方 (表1の㉔、㉕) とギフト・ステイタス関係 (㉖、㉗) とを対比的に一覧表的に示したものであるが、これで見ると、とにかくある事物が持つ価値には「シンボリック的交換」、「記号的価値」、「機能的使用価値」、「経済的交換価値」の4

表1：シグニフィケーションの論理 (logics of signification)

| 種別 | 論理 | 作用因 (operation) | 対象 (object) | 価値 (value) |
|----|-------------------|---------------------------------|----------------------|--------------------------------------|
| ① | ギフト (gift) | 両価値性 (ambivalence) | 押し付け行動 (cruel) | シンボリック的交換 (symbolic exchange) |
| ② | ステイタス (status) | 価値差異性 (difference) | 言語 (linguistic) | 記号の価値 (sign value) |
| ③ | 効用 (utility) | 実際使用 (practical application) | 用具 (instrumental) | 機能的使用価値 (functional use value) |
| ④ | 市場 (market) | 等価性 (equivalence) | 商品 (commodity) | 経済的交換価値 (economic exchange value) |

出所：G4, pp.57, 60.

種があることになるが、記号論的には、商品の場合における「経済的交換価値」も記号形態で現われると考えられるから、これは②欄に合わせて「記号的交換価値 (sign exchange value)」と表示されるのが相当ということになる (G4, p.60)。

このようにみると、以上のようなボードリヤールのテーゼには、次のような要請が含まれていると考えられる。すなわち (マルクス主義経済学などという) 商品における使用価値と交換価値との区別は、今や妥当性がない (explode)，ということである。というのは、今や政治経済はあくまでも“記号に基づく政治経済”として存在するからである。つまり今や記号生産を、上部構造の単なる一部と考え、物的生産の単なる外皮と考えるようなことはできない。商品は今やすべて記号として生産され、販売されるからである、とボードリヤールはいうのである。

ジェノスコによると、「記号をこのように政治経済のなかに採り入れることは、ボードリヤール型の記号資本主義 (semiocapitalism) の基本原型といってもいいものである。それは、記号生産に用いられた社会的労働 (social labor)，および商品交換のあり様を規定する経済的価値 (economic value) の両者を規制するものであるところの、無駄なものは排除するというすべての努力を通じて生み出されるものであり、かつ、富の蓄積についていえば、それに代えて『ある種の記号的特権的行為 (semiotic privilege)』としてなされる費用支出を通じて、記号価値およびシグニフィケーションをわが物にすることを優先させることをいうもの」と規定される (G4, p.60)。

以上のジェノスコからの引用文は、ボードリヤールのいう記号論的経済の特質を文章的に提示したものであるが、ボードリヤールは、これに基づいて価値概念の転化 (conversion) が起きるとする。その基本型は表2のようなものである。

この場合転化は、まず、程度や形により次の5種の“移行形態”に分かれる。

- [1] 第1は、商品形成形態のように、交換価値と使用価値とが直接結びつくもの (direct unity) である。商品対象型 (commodity object) といわれるもので、次頁の表2で典型的なものは① (使用価値—経済的交換価値) および④ (経済的交換価値—使用価値) で、マルクス主義経済学の中心概念

表 2：価値の転化関係

| 領域 | 転化関係 | 番号 |
|-----------|--------------------|----|
| 使用価値 | 使用価値——経済的交換価値 | ① |
| 〃 | 使用価値——記号的交換価値 | ② |
| 〃 | 使用価値——シンボルの交換価値 | ③ |
| 経済的交換価値 | 経済的交換価値——使用価値 | ④ |
| 〃 | 経済的交換価値——記号的交換価値 | ⑤ |
| 〃 | 経済的交換価値——シンボルの交換価値 | ⑥ |
| 記号的交換価値 | 記号的交換価値——使用価値 | ⑦ |
| 〃 | 記号的交換価値——経済的交換価値 | ⑧ |
| 〃 | 記号的交換価値——シンボルの交換価値 | ⑨ |
| シンボルの交換価値 | シンボルの交換価値——使用価値 | ⑩ |
| 〃 | シンボルの交換価値——経済的交換価値 | ⑪ |
| 〃 | シンボルの交換価値——記号的交換価値 | ⑫ |

出所：G2, p.7；G4, p.61.

となってきたものである。

- [2] 第2は“変形 (transfiguration)”といわれるもので、典型的には表2の②（使用価値—記号的交換価値）と⑤（経済的交換価値—記号的交換価値）である。記号的交換価値の形成が中軸的要因になるもので、例えば“社会経済上のカースト特権 (caste privilege)”等はこれに入る。
- [3] 第3は“限界超越 (transgression)”といわれるもので、典型的には表2の③（使用価値—シンボルの交換価値）、⑥（経済的交換価値—シンボルの交換価値）および⑨（記号的交換価値—シンボルの交換価値）の3者である。シンボルの交換価値の形成が中軸的要因になるもので、当該記号経済における旧来構造の脱構築 (deconstruction) が中心的問題である。
- [4] 第4は“再転化 (reconversion)”といわれるもので、典型的には表2の⑤（経済的交換価値—記号的交換価値）と⑧（記号的交換価値—経済的交換価値）である。例えば文化的優越性が経済的優越性となったような場合である。
- [5] 第5は表2の⑩（シンボルの交換価値—使用価値）、⑪（シンボルの交換価値—経済的交換価値）、⑫（シンボルの交換価値—記号的交換価値）である。これらは上記の“限界超越 (③, ⑥, ⑨)”の逆の場合で、単に“逆転 (inversion)”とされているだけであるが、要するにシンボルの交換価値が崩壊したり縮小したりする場合である。

ところが以上5種の“移行形態”は、ジェノスコの著でも、1994年の書と、2016年の書では、内容に違いがある。1994年の書では (G2, p.7)、この“移行形態”には、“生産—消費 (production

—consumption)”, “変形 (transfiguration)”, “限界超越 (transgression)” の3つのクラスター (cluster) があるとされ、以下 (表3) のように提示されている (表中の①～⑫は表2のもの)。

表3：移行形態の3クラスター

| 生産—消費 | 変形 | 限界超越 |
|-------|------------|-------------------|
| ①—④ | ②—⑦ ⑤—⑧ | ③—⑩ ⑥—⑪ ⑨—⑫ |

出所：G2, p.7.

すなわち、2016年の書で“再転化 (reconversion) (上記“移行形態”では〔4〕)”または“逆転 (inversion) (上記“移行形態”では〔5〕)”とされているものは、1994年の書では、そうした再転化または逆転を惹き起こす以前のものと、質的には区別されず、いわば同一範疇の別ケースのものとして扱われている。というよりは理論の発展過程として考えれば、同一範疇で別ケースであったものが、2016年の書では、いわば独立のものとして、すなわち独自の“移行形態”とされるものになっている、と解される。

この点で注目されることは、根本原理的出発点としてボードリヤールが次のような式、すなわち、

$$\frac{\text{記号的交換価値}}{\text{経済的交換価値}} = \frac{\text{シンボルの交換価値}}{\text{使用価値}}$$

を提示していることに対し、ジェノスコがすでに1994年の書において、「この定式は妥当性に欠ける。というのは、シンボルの交換価値と使用価値とは構造上の整合性 (a structural copulation) を有さないからである」と評していることである (G2, p.13)。ところがこの定式は、ジェノスコの2016年の書でも引用・紹介されており、この書でもジェノスコは、「ここでは記号価値の経済的価値に対する関係が、シンボルの交換価値の使用価値に対する関係に照応するとされているが、これは正しくない (not true)」と評している (G4, p.65)。

そうとするならば、前記のボードリヤールの5つの“移行形態” (〔1〕～〔5〕) のうち、少なくとも“限界超越の逆転の場合、すなわち〔5〕”は、ボードリヤールに則してジェノスコ自身が述べているように、「立証性がない」と考えるべきであり (G4, p.65；G2, p.13)、前記の“シンボルの交換価値に関するの論述 (⑩, ⑪, ⑫)”は、本稿前記で紹介のように、シンボルの交換価値の崩壊もしくは縮小の場合と解すべきものである。

こうした論議の進め方についてジェノスコは、「ボードリヤールのこうした仕方 (gambit) は、一言でいえば、“アンチ記号論”の主張を記号構造的策略 (maneuvers) で糊塗するものといわれてもやむをえないものであるが、いずれにしろ、こうした仕方に対する反論は、素早くなされるべきものというよりは、静かに (quiescently) なされるべきものである」と評している (G4, pp.65-66)。

そこでジェノスコは、ボードリヤールの商品についての記号論的分析の特性を、ボードリヤールに代わって提示している。まずその出発点として、次の式が提示される (G4, p.66)。

$$\frac{\text{経済的交換価値}}{\text{使用価値}} = \frac{\text{シグニファイアー}}{\text{シグニファイド}}$$

これは、商品価値関係 (交換価値/使用価値) が記号・シグニフィケーション関係 (シグニファイアー/シグニファイド) で示されることを意味し、商品概念の記号論的表示の根本となり出発点になるものであるが、これについてジェノスコは、ここでは (商品規定において) シンボリック的な交換性が価値という分野から追放されているが、しかしボードリヤールにより一般政治経済 (学) の記号論的真髄として提示されたものは、逆に正しく、かつ明確に示されている。これは前記のバー・ゲームの一例である旨を論じている (G4, p.66)。

他方ボードリヤールによると、使用価値についてもマルクスはじめ多くの論者には誤解がある。これは例えば、前記で一言したものであるが、使用価値にも個別的な具体的側面と一般的な標準的な側面とがあるが、多くの場合、この両者は区別されていない。使用価値を個々人の欲求充足という面のみで考えるのは、個別的人間重視的な幻想であり、一種のフェティシズム的な考え方である、というのである。

かくて「この点に即しても、交換価値と使用価値を統御している論理は、同一と考えられるべきものである」とジェノスコは主張している。これはジェノスコによると、これまで解明されることがなかった使用価値の秘密 (mystery) であるが、これはボードリヤールによりはじめて見出され、提示されたものである (G4, p.68)。

ただしこの場合の関係は、あくまでも次の形で示される。すなわち、交換価値が“主体的な支配的な主演的形態 (dominant form)”をなし、その時々思想や行動の決定的なイデオロギイ的役割 (ideological masking) を果たすものであるのに対し、使用価値的側面は、それをいわば土台的に実証するものであって、“従属的アリバイ (submissive alibi)”的地位にあるものである。故にその関係は、次のように示される (G4, pp.67-68)。

$$\frac{\text{経済的交換価値}}{\text{使用価値}} = \frac{\text{シグニファイアー}}{\text{シグニファイド}} = \frac{\text{支配的主演的形態}}{\text{従属的アリバイ}}$$

この関係において、「等価性 (equivalence) は異価性 (ambivalence: 両価値性) に変わる」。それは、例えばデザインなどマーケティング方法の違いなどから生まれるシグニファイアーにおける違いによるものであり、シグニファイアーとシグニファイドとの関係は、ソシュールのいうような恣意的なものなどでは全くなくなる。

ボードリヤールの意に即してジェノスコがいうところによれば、「今や、記号論言語学 (semio-linguistics) の有名な中心命題は妥当性がないものとなる」。すなわちシグニファイアーとシグニファイドとの関係は、根本的再検討が必要なものとなり、「記号的交換価値がシンボリック的な交換に導入される道筋では、これまでのような考えに立つシグニファイアーもシグニファイドも、生き残ることはできないものと考えられる」。というのは、両者とも何かにより操作されるものとなっているからである。もっともその場合、「(記号の) 意味 (meaning) が、(こうした操作に基づく) シグニファイアーのコントロールを越えるようなことはない」(G4, p.79)。さらにレファレント (referent) が (ソシュールのいうように) 記号の枠外というようなことも、全くない。かくて記号論の祖として著名なソシュールの説は、根底から崩壊したものになる。つまり、伝習的にシグニフィケーションとされてきたものは、成立しないものとなる。

(4) レファレントの位置づけ

レファレントは、ソシュール説では記号論上無用なものとされ、否定されている概念である。これに対しパース説では、記号形態は、レプレゼンテイメン (representamen: ソシュール説のシグニファイアーに相当のもの)、インタープレタント (interpretant: ソシュール説のシグニファイドに相当のもの) 以外に、オブジェクト (object) があるとされており、これが後にオグデン (Ogden, C. K.) / リチャーズ (Richards, I. A.) (文献O) によりレファレントと名称変えされたものである。

これは、要するに、当該記号の示す實在のもの、もしくはそれに相応するもの (例えば記号の照会先のもの) をいう。この概念のないことが、良かれ悪しかれ、ソシュール説の決定的な特色であり、これを認めることのいかんは、それぞれの記号理論の基本的性格を決定する根本的要因の1つであった。ここではボードリヤールがこの点をどのように考えていたかについて、ジェノスコの記述に基づき論述する。

ジェノスコはこの個所の冒頭において、「記号とその現実 (the real) とをどのようにとらえるかという問題において最もホットな論戦の土台となってきたのは、レファレントの理論的位置づけであった」と提議している。この論戦は、例えばエコ (Eco, U.: 文献E1) とボードリヤールの間にみられたものである。こうした論争は、ジェノスコによると、根本的土台においては、今日の記号理論におけるシグニフィケーションとシミュレーションのあり方の問題に至るまで続いているのであって、レファレントについての考え方のいかんは、記号論をどのような形而上学的な (metaphysical) 学問と考えるかのいかん深くかかわるものである (G2, p.35)。

この論戦の場合、エコがレファレントをコードの理論 (the theory of codes) に入れると、その理

論は汚染されたもの (contaminated) となると主張したのに対し、ボードリヤールは、レファレントを記号論から除外したとしても、それはレファレントが (実質的に) 記号形態のなかで形而上学的に代表されていること (metaphysical representation) を否定したことにはならない。というのは、「レファレントはもともとこうした形而上学的意味づけを内有するからである。これは、記号論にとって不可欠な第1原則 (a first semiotic principle) である」と主張している (G2, p.35)。

ボードリヤールは、ジェノスコのみるところ、要するに「ソシユールが先導したところの、いわば観念論哲学的な記号－言語上における擬制 (fiction of idealistic semio-linguistics) の立場にたつて、この分野における記号論的アプローチの形式的純粹化 (purification) を提唱している」ものと位置づけられる。

またこの論戦は、ボードリヤールとバンヴェニスト (Benveniste, F.: 文献B2) との間でもみられたものであるが、ボードリヤールでは、レファレントは要するに「記号から生まれる現象的な後光 (phenomenological halo of the sign) というべきもの」と提議されている (G2, p.39)。

以上に基づきボードリヤールは、「もし記号とそのレファレントとの分離が擬制というならば、これら両者の再結合 (reunion) も“学問上の擬制”になる」と評している。結局、ボードリヤールの言わんとするところは、始原的に考えれば、存在論的にも年代順的にも、レファレントは、シグニファイアーに代表される記号に先行するものであり、この関係が崩壊した後ではレファレントは、記号すなわちシグニファイアーに包含され、レファレントは“記号のレファレント上の実在証明 (alibi)” というものになる。故にエコが、記号によるシグニフィケーションには常に虚偽 (lying) が含まれているというならば、ボードリヤールでも同様に、“シグニフィケーションには常に虚偽がある。しかし、その実在証明は、レファレントにより可能”ということになる。

この点について “*Stanford Encyclopedia of Philosophy*” の “Jean Baudrillard” の項 (文献S) では、「パロディ的学問 (pataphysics) から形而上学的 (metaphysics) へ、および、オブジェクト (object) の勝利 (triumph)」という見出しの款があり、それによると、ボードリヤールにはもともと当初から“客体 (object) は主体 (subject) に勝利する”、“商品が人間を魔了するもの”という考え方があり、それが、ボードリヤールの有名な消費者社会論 (consumer society) の土台の1つとなってきた。そしてさらに、ひとつにはこうした考え方の故にボードリヤール説は、“極めてポピュラーのものとなり、人々を魅了するものとなってきた”といわれている (S, pp.11-12)。

もとよりこのことは、ここで論じているレファレントとは問題の位相がやや異なるが、この点に関するボードリヤールの考え方の原点を知るには実に有用のものと思われる。ただしこの場合ボードリヤールでは、レファレントはあくまでもシグニファイアーに採り入れられ、これにより示されるものであるから、シグニファイアーが人間に打ち勝ち、人間を魔了するものとなること、すなわち「シグニファイドもシグニファイアーの1つの結果 (an effect) にすぎないもの」と規定されるものとなることこそ、全く肝要な点と思われる (B3, p.1)。

(5) シミュレート像の時系列的モデル

このうえにたつてジェノスコは、ボードリヤールが提議している“社会のあり方のモデル (models of simulation : the orders of simulacra : ここでは「シミュレート像の時系列的モデル」という) を紹介している。これは、結局、ここで問題のレファレントのあり方を理論づける基礎的原理となっているものである。これは表4のようなものである。

表4：シミュレート像の時系列的モデル

| ステージ | 価値原理 | 形態 | 記号 | 機械作業原理 | 大体の時期 |
|------|---------------------|--------------------------|------------------------------------|---------------------------|-------------------|
| I | 実物的 (natural) | 模倣 (counterfeit) | 模倣シンボル (corrupt symbol) | オートメーション的 (automation) | ルネサンス以後 産業革命まで |
| II | 市場的 (market) | 生産 (production) | アイコン (icon) | ロボットの (robot) | 産業革命進行時期 |
| III | 構造的 (structural) | シミュレーション (simulation) | 2面精神的 (two-sided psychological) | アンドロイド的 (android) | ポスト産業時期 |
| IV | フラクタル的 (fractal) | 増殖 (proliferation) | 換喩／インデックス (metonymic/index) | ヴァーチャル的 (virtual) | ポストモダン時期 |

出所：G3, p.8 による (cf. G2, p.42)。ただし最右欄はジェノスコの記述により本稿筆者で作成。

この表はもともと、レファレントの時系列的推移を表示するところに要点があり、しかも価値の法則 (the law of value) に立脚しているところに特色がある。ただしジェノスコによると、この表における時代区分は厳密なものではなく、かなり概括的なものである。

この表では、レファレントのとらえ方について、直接的にはマルクス説とソシユール説に立脚するという断わりが付いているが (G2, p.42)、一言でいえば、ボードリヤール説に基づき、ルネサンス以降近代におけるシミュレーションの長い歴史を、直接的にはジェノスコがまとめたものである。

それ故、例えばこの表の以前の時期として、“シンボリック秩序的なシユア記号 (sure sign) の時代” というべき時期がある。これは、ボードリヤールによると、レファレントにより直接的に意味づけられる時代をいうものである。従ってこの時代は、記号論の意味でいえば、ソシユールが現代記号について規定しているところとは異なって、“恣意性などは全くない (non arbitrary) 時代” と、特徴づけられる (G2, p.45)。

こうしたいわば閉鎖的な時代は、さしあたりルネサンスの運動により変わったものとなり、いわゆる近代が始まるが、その当初は、同じものをとにかく量産するという、模倣が時代精神的な流れ作業、つまり手作業的な自動的進行作業、すなわちオートメーション的なものであった。故に記号も“模倣的な (corrupt : あるいは新鮮さのない) ものであり、しかもそれは、本来的に

は（他の時代における）アイコンやインデックスとは異なり、シンボル”すなわち“象徴”という意味の強いものであった。つまり、レファレントとの内容的関連性が（アイコンやインデックスよりも）強いものであった（ここでアイコン（icon）とは当該記号の対象物すなわちオブジェクトもしくはレファレントの全体像を示す、例えば写真や絵などをいう。インデックス（index）は当該対象物の一部を示すものをいう）。

これが次の時代（第Ⅱステージ）へ移行するのは、産業革命の進展によるところが大きい。これによりシンボリックなものは、「レファレント上の義務的なものから解放された」ものとなった。ボードリヤールは、この時代を「“族内的（endogamous）シグニフィケーション”から、“民主的あるいは自由主義的”とよばれるものへの移行、つまり“族外的（exogamous）シグニフィケーション”への変化」とよんでいるが（G2, p.45）、機械による自動的生産という意味でロボットのなものとなった。記号も、とにかくなんらかの形でレファレントの実際的全容を具体的に示す絵などのアイコン的なものが優勢のものとなった。それは、アイコン的文化とよんでもいいものであった。

第Ⅲのステージは、機械的大量生産が定着し、生産の一般通例的な常識的な考え方としても普及をみた時代で、社会的問題についても一般システム論的な考え方が定着し、人々の行動範囲も世界的規模において一般システムのものとなった時代である。ボードリヤールでは、モノ（Monod, J.: 文献 M6）から、相互の分子存在性を前提とする“stereospecific complex”の考え方を導入しているが、それは要するに、アンドロイド（人造人間：機械的人間）という考え方であった。

記号論全般ではグレマスの理論が広く知られるようになったこともあり、レファレントに関しては次の4種の考え方があるものとなってきた。すなわち①実際上ではレファレントはないとされるもの、つまりある意味で言語や記号のうえだけであるとされるもの、②レファレントについて特定化が難しい（undefined）もの、③通常的にレファレントがあるとされるもの、④さらにグレマス説の影響もあり、記号には言語で表現されないもの（the extra-linguistic world）もあることが主張されるようになり、「レファレントには明示性の低いものもある」という主張も認められるようになってきた。こうしたものは、旧来、「レファレントがない謬論（non-referential fallacy）」と言われ、ボードリヤール自身もそうした謬論の一人といわれたりしたが、考え方は変わってきている。

こうした広い考え方にたつものが、上記表4で第Ⅳステージと表記したものである。この点についてのジェノスコの説明は、実は、著書により異なるところがある。1994年の書によるとこれは、オーギイ（orgy：乱飲乱舞、以下「オーギイ」という）の経験以降における人間の過ごし方の問題となっている。オーギイは、いわば近代を特徴づける解放の頂点を示したものだといえるが、これによってハイパーリアリティも実現したといえるものであって、その後における革命的な解放も、それほど革命的とは言えないものとされている（G2, p.52）。

こうしたこともあってこのステージは、フラクタル（fractal：次元分裂図形）といわれる。その特色は、ボードリヤールによると、「価値（観）におけるある種の増殖（a sort of proliferation）およびある種の突発的流行（a species of an epidemic）にある。ただしその際、価値（観）は完全にフラクタ

ル的なものとなり、もはやどこに本拠・本義があるかわからないものとなる」(cited in G2, p.52)。

故にジェノスコによると、このステージは価値(観)があらゆる方向できらきら輝くものとなる。ある意味でそうであるが故に、この時期では、レファレントというべきものは何もない時期となる。ボードリヤールは、このステージについて、それは本来レファレントがない時代と定義されるものであるが(G2, p.52)、換言すればこのステージは、物事で分別がなくなった(indistinct)時代と特徴づけられるものであり、上記表4で表記されているように換喩的で、かつ高度な伝染性(contagious)をもつものであって、記号論的にはインデックスが支配的なものになる時代である(G2, p.53)。本稿筆者としても、その文化はまさにインデックス文化というべきものであると考える。

ジェノスコの1994年著書において第IVステージで代表的な事象となっているオーギイは、実は、ジェノスコの2016年の著書では、“マスクレイド(masquerade: 仮装舞踏会)”として論じられているものに相当する。ここにおけるジェノスコの記述によると、ボードリヤールはパワーのあり方について“支配(domination)”と“ヘゲモニー(hegemony)”の2者があるとし、前者の支配が、“力の不均等的な2重制的な存在(a dual relation of asymmetrical force)”をいうのに対し、後者のヘゲモニーは、人間間の関係が“統合的、ネットワーク的、計算立脚的でサイバネティックなもの(integral, networked, calculated, cybernetic)”をいう。

これはジェノスコによると、究極的には“シミュレーションの再劇場化(retheatricalization)”といわれるものであるが(G4, p.85)、こうしたことは、ボードリヤールによると、今日の社会が根本的にはメディアとマスコミュニケーションによって“反応のない社会(nonresponse)”になっているために、起きている。これをジェノスコは、“反対ギフト(counter-gift)の無い社会”と表現し、こうした“反応のない社会”から脱却するためには、体制的メディアについてなんらかの“解体再構築(deconstruction: デコンストラクション)”が必要である。それには(体制側コミュニケーションにおける)“シグニファイアーとシグニファイドとの分離”に始まって、“反対ギフトにおける送り手と受け手との関係の樹立”に至るまでの諸方策があると論じている(G4, p.90)。

ジェノスコは、ボードリヤール説の真意はここにあるとし、それを現在における批判的記号論の代表的形態の1つとして位置づけている。ボードリヤールが論じている事柄は、実に多くの分野にわたるが、批判的記号論としては、現在のところ、以上のような評価になるものと考えられる。

IV. あとがき——ボードリヤール説の評価について

ボードリヤール説の評価について、批判的記号論にかかわる点については、すでに上記で一言している。全体的にみると、その柱になっているものは“記号的交換価値”であるが、これについてマン(Mann, D.: 文献M1)は、さしあたりそれは、要するに、日常生活において区別

(distinction) や好み (taste) の違い、つまり、社会的ステイタス (social status) 上で違いがあることを示す機能、すなわち社会的なシンボリックな違いがあることを表示する働きがあることを示すものと規定している。

しかしマンは直ちに、ボードリヤールが究極的に目指していたのは、こうした差別的社会の進展ではなくて、「人々が交換するものは、あくまでもギフトである社会の到来である。それは、交換上でなんの差別化的価値をもつものではない。友情・愛情・共同体的精神の発露として交換し合うものである。そうした社会の到来をボードリヤールは希求していたのである」と述べ、このことは、ボードリヤールがハイパーリアリティをもって、“リアリティの死 (the death of real)” ととらえていたところにはっきり見られるとしている (M1, p.1)。

つづいてマンによると、ボードリヤールは自らをポストモダン論者と認めたことはない。しかしマンのみるところでは、その所論が本来的にはポストモダン論といわれるものであったことは間違いない。そしてマンは、ボードリヤールの所論は実に難解であるが、その言わんとするところは簡潔である。

すなわちボードリヤールは、要するに、「われわれは“現実 (the real)” という砂漠のなかで生きているのだ。それはテレビやコンピューターイメージで作り出されたものである。それは“メディアなどのないリアリティ”よりも、確かに“よりリアルなもの”である。しかしこうしたリアリティは、(単に) 理解するだけならば、さほど困難なものではない。しかしそれを呑み込むことは、実に困難なものである」と主張していたのである (M1, p.5)。

この点に関連しオーストラリア・クィーンズ大学のバトラー (Butler, R.) は、すでにジェノスコの1994年著書 (文獻 G2) の書評的な論考 (文獻 B4) において、ジェノスコが記号のレファレント性について強い関心を持ってボードリヤール説について論究していることを高く評価し、最終的には“real”について実際にどのようなかを正確に記述することはできないが、すべてのシステムについて (“real”を前提にできるから) 逆のもの (reversal) や逆転過程 (reversion) を可能にする原則を知ることにはできる。(この意味でも) ジェノスコの書は、記号論分野におけるボードリヤール研究について新しい時代を開いたものである」と評している (B4, p.5)。

しかしボードリヤール説に対しては、マルクス主義理論の立場からは、強い批判がある。ちなみに、以上とは別に、マルクス主義理論の立場から記号論的展開を図る“記号論的マルクス主義 (semiotic marxism)” とよばれるものが、1970年代に生まれている (B3, p.1)。

これらをふまえて、例えばギリシャ・アリストテレス大学のラゴプーロス (Lagopoulos, A. P.) は1992年に、次のような見解を発表している。すなわち、マルクス主義的に考えるならば、下部構造と上部構造に大別されるから、前者の根幹が商品等の“生産—流通—消費”の過程としてとらえられるのに対応して、後者のそれは事象の“シグニファイアー—シグニファイドのデノテーション (denotation: 外示的認識) —コノテーション (connotation: 内包的認識) の過程としてとらえられる。要するに社会はこの二重性の枠組みでとらえられるのであり、それ故、マルクス主義

の考え方は、これまでのように単に“史的唯物論”といわれるのではなく、“記号論的史的唯物論 (historical-semiotic materialism)”といわれるべきものになる、と提議している (L1, p.275)。

ここにはマルクス主義的立場にたつ記号論原理論の1つの類型をみることができるが、ところでこのうえにたつてラゴプーロスは、わざわざボードリヤール説に言及し、それは結局、記号論としても本来の考え方から逸脱している。つまりそれには、本来の記号—機能性 (sign- function) がない。従って対象 (objects) についての記号機能性がないものである。故にそれは、實際上、対象の存在について1つの神話 (myth) にすぎないものである、と評している (L1, p.276)。マルクス主義的にはこのような総括にならざるをえないであろう。

参考文献

- B1: Baudrillard, J. (1976), *L'Exchange Symbolique et la Mort*, Paris: Gallimard.
- B2: Benveniste, E. (1966), *Problèmes de Linguistique Générale*, Paris: Gallimard.
- B3: Bergeson, A. (1993), The Rise of Semiotic Marxism, *Sociological Perspectives*, Vol.36, pp.1-22.
- B4: Butler, R., Paradox of the Sign, in: Volume 7 of *the Semiotic Review of Books*, retrieved April 13, 2018, from: <https://project.chass.utoronto.ca/semiotics/srb/paradox.html>
- D: Debord, G. (1983), *The Society of the Spectacle*, Detroit: Black & Red.
- E1: Eco, U. (1976), *A Theory of Semiotics*, Indiana University Press.
- E2: Jean Baudrillard (2018), in: *Encyclopaedia Britannica*, retrieved April 27, 2018, from: <https://www.britannica.com/biography/Jean-Baudrillard>
- G1: Gallop, J. (1985), *Reading Lacan*, Cornell University Press.
- G2: Genosko, G. (1994), *Baudrillard and Signs: Signification Ablaze*, London: Routledge.
- G3: Genosko, G. (2007), Jean Baudrillard's Contribution to Semiotics and Structural Studies, *International Journal of Baudrillard Studies*, Vol.4, pp.1-18.
- G4: Genosko, G. (2016), *Critical Semiotics, Theory, from Information to Affect*, London: Bloomsbury.
- L1: Lagopoulos, A. P. (1992), Postmodernism, Geography, and the Social Semiotics of Space, *Environment and Planning D: Society and Space*, Vol.11, pp.255-276.
- L2: Lyotard, J. (1975), For a Pseudo-Theory, Moshe Ron (trans.), *Yale French Studies*, Vol.52, pp.115-127.
- M1: Mann, D. (2018), Jean Baudrillard: A Very Short Introduction, retrieved April 27, 2018, from: <http://publish.uwo.ca/~dmann/ baudrillard.html>
- M2: Martin, B. and Ringham, F. (2000), *Dictionary of Semiotics*, London: Cassell.
- M3: Mauss, M. (1973), *Sociologie et Anthropolologie*, Presses Universitaires de France.
- M4: McLuhan, M. (1964), *Understanding Media: The Extensions of Man*, New York: MacGraw-Hill.
- M5: Mendoza, D.Y. (2010), Commodity, Sign, and Spectacle: Retracing Baudrillard's Hyperreality, *Kritike*, Vol.4, pp.45-59.
- M6: Monod, J. (1970), *Le Hasard et la Nécessite*, Paris: Edition du Seuil.
- O: Ogden, C. K. and Richards, I. A. (1923/1989), *The Meaning of Meaning*, San Diego: Harcourt Brace Jovanovich.
- S: Jean Baudrillard (2007), in: *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, retrieved April 27, 2018, from: <http://plato.stanford.edu/entries/ baudrillard/>
- V: Veblen, T. B. (1899), *The Theory of Leisure Class*, New York : Macmillan.
- Q1: 大橋昭一 (2015)「商業・マーケティング領域についての記号論的分析の形成過程—その特色はどこにあるか」『関西大学・商学論集』60巻3号, 81-99頁

- Ω2: 大橋昭一（2016）「ツーリズムの記号論的展開過程—わが国における観光概念の規定の前進のために」『和歌山大学・観光学』14号, 13-22頁
- Ω3: 大橋昭一（2017）「記号論に立脚したツーリズム研究の特性について—ツーリズム研究の一層の発展のために」『観光学評論』5巻2号, 165-180頁
- Ω4: 大橋昭一（2018a）「組織記号論と批判的記号論—最近における記号論拡大の2つの方向」『関西大学・商学論集』60巻4号, 157-185頁
- Ω5: 大橋昭一／竹林浩志（2018b）「組織の新しいとらえ方—組織記号論をめぐる諸論調」『和歌山大学・経済理論』392号, 59-79頁

Understanding Baudrillard's Theories of Anti-Semiology

Shoichi OHASHI

Abstract

Jean Baudrillard's theories on semiotics (semiology) are multi-faceted to such an extent that it is exceedingly difficult to understand the disciplined essences as an integral theory of modern civilization. In this paper, mainly the opinions of Dary Y. Mendoza and Gary Genosko on Baudrillard's theories are reviewed. This review reveals the determinant significance of value concepts in the theoretical structure of Baudrillard's advocacy, which are often not considered when estimating it.